

# ヤチシャジンの栽培増殖について

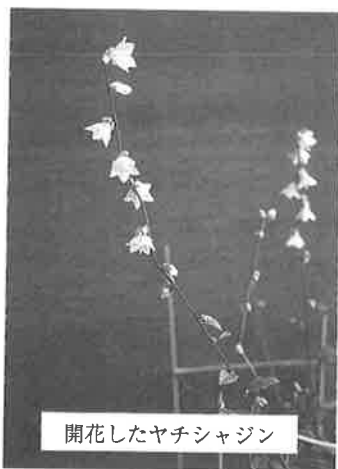
尾崎 健司

ヤチシャジン (*Adenophora palustris* Komarov) は、キキョウ科のツリガネニンジン属に属し、日本から朝鮮半島、中国大陸東北部にかけてまれに湿地に分布する多年草である。国内では、愛知、岐阜、岡山、広島県の4県に限って分布するが、自生地である湿地が農耕地整備、排水改良工事等によって破壊されたり、また園芸の目的で採集されたため、ある場所では絶滅し、多くの自生地で絶滅寸前の状況に置かれている。

広島県内の分布は、世羅台地、神石高原のごく一部の湿地に限られ、広島県の条例によって絶滅危惧種に指定されている。自生地周辺の開発防止、湿地の保全、山野草業者や趣味家の盗掘防止等の保護対策を急がなくてはならない貴重な植物である。世羅町、甲山町ではヤチシャジンの自生地を保護するために、湿地及びその周辺の整備を定期的に行うとともに、実生により増殖した株を植え戻す努力がされている。ところが、発芽率が低いという増殖上の問題に直面している。

甲山町公民館の勝見明尔館長よりヤチシャジンの栽培及び増殖を依頼され、1995年6月12日に自生地の調査を行った。

その際、15本の株立ちとなった10号鉢を1鉢預かった。その株を栽培した結果、開花、結実に至ったので、調査した自生地の状況とともに報告する。



## 1. 自生地の環境

甲山町、世羅町の2か所で自生地の調査を行った。まず、甲山町の自生地は、標高約450mに位置し、岩盤の上にうっすらと腐植土が堆積した所に湧き水が少し流れて形成された湿地であった。ヤチシャジンはアカマツ林と湿地の境界部分の比較的明るい場所に生育しており、湿地の中でもあまりじめじめしていない、水の停滞しない場所にのみ見られた。湿地には他に、ミズゴケ、モウセンゴケ、サギソウ、トキソウ、カキラン、キセルアザミ、ハナゴケ、シオガマギク等の自生が観察された。また、周辺には何かを引き抜いた穴や、踏み荒らした足跡が残されており、盗掘されている様子であった。

次に世羅町の自生地は標高は約450mの休耕田と思われる場所で、周辺はスギが植林されており、湧き水の流れのほとりに自生していた。ここでは、定期的なスギ林の間伐や下刈りを行い、林床の日当たりを確保する努力がされていた。他にはミズゴケ、トキソウ、サギソウ、ミカワシオガマ等の自生が観察された。

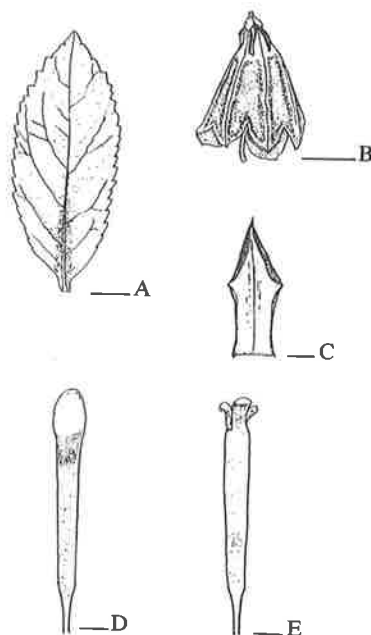


図. ヤチシャジンの外部形態 A. 葉 B. 花冠 C. がく片 D. 雌しべ (開花始め) E. 雌しべ (受粉時)  
(図中の横棒は A、Bが1cm、C、D、Eが1mmを示す)

## 2. 外部形態（開花時）

栽培した株は、1995年7月28日から9月8日までの43日間に亘って次々に開花した（写真）。その時の外部形態は以下の様であった。

**茎** 高さ30～110cm。基部の太さ3～5mm。幼苗時には丸く白っぽいのが、開花時には角張り、無毛で紫色をおびる。表面は硬く、直立するが、折れやすい。切ると乳白色の汁が出る。

**葉** 互生。鋸歯縁。長楕円形で先端は鋭形。長さ4～6cm、幅2～3cm。基部は狭くなり、葉柄はないかまたはほとんどない（図-A）。根生葉には長い柄があってその葉身は円形。

**花** 穂状花序をなす。花冠は薄紫色の漏斗状鐘形で、長さ15～20mm（図-B）。小花柄はほとんど無いか、あっても長さ1mm程度。花柱はわずかに花冠の外に突き出る。1か所の葉腋から3～5個、茎1本当たり20～40個の花をつけ

る。ひとつの花の寿命は2～4日であった。がく片は先が鋭尖で披針形、長さ5mm、幅2mm。菱形（図-C）。柱頭は開花始めは丸いが、受粉する頃には3裂する（図-D, E）。花柱の基部は、淡黄色で花盤に囲まれる。花盤は白色で細かい毛が密に生える。長さ3mm、幅2mm。

**種子** 1995年10月9日から約2ヶ月間に完熟した種子約1,000粒を採取した。種子は薄い茶褐色からこげ茶色で、表面は、へこんだものや、ふっくらとしたものなど様々であった。

採取した種子は、5℃の冷蔵庫で保存しており、これから播種を行い、増殖に努めたいと考えている。また、その他の増殖法についても検討を進めて行く予定である。

貴重な機会を与えてくださった勝見明尔氏、現地を案内して下さった実光紀之氏に感謝します。

## 変化アサガオ種子の冬季試験播きの検討

井上尚子・門村逸喜

当園では、昭和57年に国立遺伝学研究所、昭和58年に変化アサガオ愛好家の故小川信太郎氏より変化アサガオの分譲を受け、以来、毎年夏に変化アサガオの展示を行ってきた。江戸時代より現在まで伝えられるこれらの古典園芸植物を、後の時代に伝えていくことは、大切なことであると思われる。

さて、変化アサガオには、「正木」と呼ばれるものと、「出物」と呼ばれるものがある。「正木」からは毎年種子がとれ、発芽した株も同じ変化形態をもつので、系統を維持することは比較的難しいことではない。一方、「出物」では、雄しべ、雌しべが退化または花弁化しているので、種子はできない。このため、これらの系統を維持するためには、出物の性質を劣性遺伝子としてヘテロの状態で持っている株（親木）から種子を採らなければならない。

しかし出物の親木は、外見は、出物の性質が完全に抜けてしまった並のアサガオとほとんど変わらない。したがって出物の出現する確率に合わせて、外見上並のアサガオを複数育てなければならない。そのアサガオが親木かどうかは、種子を播いてその中から出物が現れてはじめて分かることである（図1参照）。

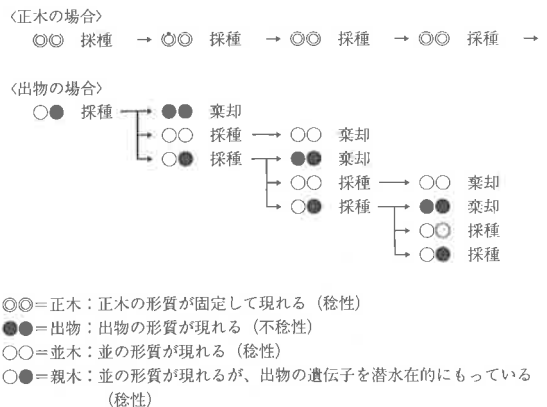


図1 変化アサガオ（正木、出物）の系統維持のしくみ